『詩聖堂詩話』注釈（下）

山口　旬

○本稿は、『「詩聖堂詩話」注釈（上）』（『成蹊人文研究』第十八号、平成二十二年三月刊）の続編であり、凡例その他は前稿と全て同じである。

（二〇）『増注聯珠詩格』について

世に『増注聯珠詩格』有り。作者の姓名を載せず。或は疑ふ、五山の僧徒の作る所と。頃日、朝鮮本の『聯珠詩格』を得たり。末に弘治二年、竹溪安琛、字は子珍なる者の跋有り。云はく、「成化乙巳年間、達城の徐公居正、増して註解を為す。後七年、我が成宗大王、臣琛及成俔・蔡壽・権健・申従濩に命じて、徐注を将て重て補削を加へしむ。既に獻じて鑄字を用ゐ、印頒す云云」と。今本、此の跋文無し。故に人の疑を致す。為めに録して世に告ぐ。〔徐居正・申従濩・成俔の三人、朱竹垞の『明詩綜』に見ゆ。〕

【大意】世間に『増注聯珠詩格』の書がある。そこには作者の姓名を載せていない。ある人は疑って、「日本の五山の僧侶が作ったのではないか」と言っている。最近、朝鮮本の『聯珠詩格』を手に入れた。その末に弘治二年、竹溪安琛、字は子珍という者の跋文がある。言うには、「成化乙巳年間に、達城の徐公居正が、注解を付け加えた。その後七年、我が成宗大王が、臣である私、琛と成俔・蔡壽・権健・申従濩に命じて、徐の注にさらに重ねて補削を加えさせた。既に献上して金属活字を用いて、出版頒布した云云」と。現在の通行本には、この跋文がない。したがって、上のような疑を招くことになった。そこで、ここに記録して世間に知らせることにする。〔徐居正・申従濩・成俔の三人は、朱竹垞の『明詩綜』に見える。〕

○**『増注聯珠詩格』**　本文に言うように、李氏朝鮮の徐居正の詳注を附した朝鮮版の翻刻本。　○**弘治二年**　明の年号。一四八九年。当時の李氏朝鮮では明の暦を用いていた。　○**竹溪安琛**　李氏朝鮮、成宗治下の文官と思われる。　○**成化乙巳年間**　一四八五年。　○**達城**　朝鮮の地名。　○**徐公居正**　徐居正。朝鮮王朝初期の学者・官僚。一四二〇～一四八八。　○**後七年**　計算上は後四年になるので、なにかの錯誤があるか。　○**成宗大王**　李氏朝鮮第九代国王。学問を愛好した。一四五七～一四九四。　○**成俔・蔡壽・権健・申**

従濩　成宗治下の文官と思われる。　○朱竹垞　清、朱彝尊。学者。一六二九～一七〇九。　○『明詩綜』　巻九十五上に、徐居正以下三人の官名と詩が各一首ずつ載せられている。

（二二）山本北山親子との一挿話

余、伊勢より歸り、山本汎居が緑陰茶寮に寓す。庭前、紅梅一樹有り。已に實を結ぶ比ろに、葉間、更に両三點白花を發す。余、詩有り。云はく。

虢國夫人玉作肌　　虢國夫人　玉を肌と作す
誤隨時世競妍嬋　　誤て時世に隨て　妍嬋を競ふ
又猜新様不相稱　　又猜ふ　新様の相稱はざるを
偸卸紅粧試舊姿　　偸に紅粧を卸して舊姿を試む

詩成る。以て北山先生に似す。先生曰はく、「虢國は淫行の女子。以て梅花の清白に比すべからず」と。余、退て汎居に告げて曰はく、「先生、一大議論を起して以て詩を論ず。此れ則ち、先生の先生たる所以なり」と。

【大意】私が伊勢から帰り、山本汎居の緑陰茶寮に寄寓した時のこと、庭先に、紅梅が一樹あった。既に実を結ぶころに、葉の間に、更に二、三の白い花を開いた。そこで私が作った詩に言う。

虢國夫人は玉のような白い肌をしている
流行に乗って美しさを競っているのだ
しかし最新の流行の化粧が似合わないのではないかと疑い
秘かに紅色の化粧を落としてもとの白い姿を試みているのだ

詩ができて北山先生に見せると、先生は、「虢國夫人は淫行で知られた女性である。それを梅花の清らかな白に例えてはいけない」と言う。私は、退散して汎居に告げて言った、「先生が、大議論を起して詩を論じはじめてしまった。しかし、これがまさに、先生の先生たる所以なのだ」と。

○伊勢　四話に「乙卯（寛政七年）の歳、伊勢に到る」とある。
○山本汎居　山本緑陰。二十二話参照。　○虢國夫人　楊貴妃の姉。美貌を誇り、化粧を施さず素顔で天子に朝したという。

【補説】山本北山は、清新性霊派の詩論を主導したが、実作は苦手だったと言われる。そうした、北山の一面がうかがえるエピソードである。

（二三）山本汎居の紹介

汎居、名は謹、字は公行、北山先生の適嗣なり。余より少きこと十歳、交、最も相親し。其の「蛙を聞く」に、

斷續聲中種種聲　　斷續聲中　種種の聲

の句有り。竒警、喜ぶべし。又、「晩秋」に云はく。

天氣慘凄霜下緊　　天氣　慘凄　霜の下ること緊し
衆林染盡到秋過　　衆林　染め盡して　秋の過るに到る
小齋簾捲軽風入　　小齋　簾捲て　軽風入る

午睡枕邊紅葉多　午睡枕邊　紅葉多し

汎居、毎月、北皐・櫻宇・延年・天来・董堂・山松・顕臣・共懿の諸人を集めて韻を分け詩を賦す。必ず余を推して牛耳を取らしむ。汎居、固より詩材多し。我れ其の愈よ老て愈よ熟し愈よ其の妙に到らんことを望む。

【大意】山本汎居、名は謹、字は公行、北山先生の嫡男である。私より十歳の年少で、最も親しく付き合っている。その「蛙を聞く」に、

途絶えたり続いたりする声の中に様々な蛙の声が聞こえる

の句がある。奇抜で、喜ぶべき句だ。また、「晩秋」に言う。

天気は物寂しく霜がびっしりと降りた
林じゅうを染め尽くして、秋がやって来たのだ
小さい書斎で簾を捲き上げれば微風が入ってくる
昼寝している枕辺にも紅葉がたくさん落ちている

汎居は、毎月、北皐・櫻宇・延年・天来・董堂・山松・顕臣・共懿の諸君を集めて、韻目を分担し詩を作った。その時、必ず私を推薦してまとめ役をさせた。汎居、もとより詩の表現の範囲は広い。私は、彼がいよいよ円熟し、詩の絶妙な境地に到ることを期待している。

○**汎居**　山本緑陰。漢学者。一七七七～一八三七。　○**北皐**　『臭蘭稿甲集』に「山本明卿。名は時亮、北皐と号す。東都の人。」とある。　○**櫻宇**　二十三話参照。　○**延年**　二十四話参照。　○**天来**　二十五話参照。　○**董堂**　二十六話参照。　○**山松**　二話参照。○**顕臣**　不明。　○**共懿**　飯田共懿。四十話にも見える。『五山堂詩話』巻五に「板橋の人。業を北山先生に受く」とある。　○**韻を分け**　分韻。詩会で各人に韻目を割り当てて詩を詠む方法。

【補説】山本緑陰の詩会に参加した詩人の名が列挙され、以下の段でそれぞれが紹介される。当時の若手の詩会の様子がうかがえて興味深い。

（二三）山田櫻宇の紹介

櫻宇、「春日晨起」に、

暖被醒来初轉枕　暖被　醒め来て初て枕を轉ずれば
満窓花影午鶏聲　満窓の花影　午鶏の聲

の句有り。七言、「移居」に云はく。

従移閑地詩多瘦　閑地に移りしより詩多く瘦せ
自買好山家倍貧　好山を買ひしより家倍す貧し

五言に云はく、

斜日孤村雨　斜日　孤村の雨
殘虹半野晴　殘虹　半野の晴

「梅を看る」に云はく。

雪暗初晴後　雪は暗し　初て晴るる後
月奇将曙前　月は奇なり　将に曙けんとする前

皆な佳句なり。櫻宇、姓は山田、名は直大、字は伯方なり。

【大意】山田櫻宇の、「春の日の朝寝坊」に、

暖かな掛布団から覚めて来てやっと枕を傾けると
窓いっぱいの花が映り、正午を告げる鶏の声が聞こえる

という句がある。七言句では、「転居」に言う。

閑静な土地に移ってからというもの、詩は多くしまって痩せ
よい山を買ってからというもの、家は益々貧しくなった

五言句に言う。

夕日の頃、僻村に雨が降り
消え残りの虹が、半分晴れた野原にかかっている

「梅を看る」に言う。

やっと晴れた後でも、雪はかすかに梅にかかり
夜明け前の月は美しく梅を照らす

どれもみな佳句である。櫻宇、姓は山田、名は直大、字は伯方である。

○櫻宇　山田櫻宇。『臭蘭稿甲集』に、「山田直大、字は伯方、西湖と号す。東都の人。」とある。

【補説】「春日晏起」の詩は、范成大「四時田園雑興」の「柳花深巷午鶏聲。桑葉尖新緑未成。坐睡覚来無一事。満窓晴日看蠶生。」と語彙を共通する習作的作品と思われる。

（二四）松井延年の紹介

延年、姓は松井、名は壽。「梨花」に云はく。

夢中相遇林之下　夢中　相遇ふ　林の下に
玉骨美人雲作裳　玉骨の美人　雲を裳と作す
洗盡嬌顔雨晴夕　嬌顔を洗ひ盡す　雨の晴るる夕
更臨月鏡試新粧　更に月鏡に臨で　新粧を試む

【大意】延年、姓は松井、名は壽である。「梨花」に言う。

夢の中の林の下で出逢ったのは
玉のような美人で、雲をスカートのようにしている
雨の晴れた夕べには、美しい顔を洗ひ尽くして
そのうえ、月の鏡に向かって新しい化粧を試みる

○延年　松井延年。『臭蘭稿甲集』に「名は壽。碧海と号す。東都の人」とある。

【補説】「梨花」の詩は、全編に巫山の夢の故事を踏まえている。夢中で巫山の神女と契りを結んだ帰りに、神女は朝は雲に夕は雨となると告げて消えた、という。

（二五）興住天来の紹介

天来、姓は興住、名は時雨。「秋晩」に云はく。

半庭斜日雨初晴　半庭の斜日　雨　初て晴る

雨後秋風驟冷生　雨後の秋風　驟冷　生ず
白帝明朝欲回駕　白帝　明朝　駕を回さんと欲す
赤衣使者啓前行　赤衣の使者　前行を啓く

「秋日」に云はく。

昨来知道微霜下　昨来　知道す　微霜の下るを
染得楓梢第一枝　染め得たり　楓梢の第一枝
只恐金魚不堪冷　只だ恐る　金魚　冷に堪へざるを
取来破笠覆盆池　破笠を取り来て　盆池を覆す

天来、詩を學ぶ、未だ一年ならず。已に此の手段有り。謂ふ所、詩に近き者なり。

【大意】天来、姓は與住、名は時雨である。「秋の晩」に言う。

雨がやっと晴れて、庭半分に夕日があたり
雨あがりの秋風は、にわかの寒さを送ってくる
秋の神の白帝は明朝、帰路につこうとしている
赤衣の赤とんぼが使者となり、先払いをつとめる

「秋の日」に言う。

昨日から微かな霜が降りるのに気づいたが
楓の梢の第一番の枝はすっかり紅く染まった
ただ心配なのは、金魚が寒さに堪えられないこと
破れ笠を取って来て、金魚鉢にかぶせてやった

天来は詩を学んでまだ一年に満たない。もうすでに、この手腕がある。生まれつき詩に近い者というところだろう。

○**天来**　與住天来。或いは與住順庵か。詩の素材から言っても、まだ詩を学んで一年未満という記述からも年少の作者が想像されるので、後の改名があったかもしれない。　○**白帝**　五天帝の一人で、秋を支配する神。　○**赤衣使者**　蜻蛉の異名。

（二二八）中井董堂の紹介

董堂、名は敬議、字は伯直。書を以て世に名あり。書、董玄宰を學ぶ。因て以て號と為す。其の「中野素堂を送る」に、

今日送君猶未別　今日　君を送て猶ほ未だ別れざるに
已従今日待君還　已に今日より君が還るを待つ

の語有り。最も婉麗たり。又、「病中花遅き」に云はく。

二月中旬猶有雪　二月中旬　猶ほ雪有り
石爐添火下重帷　石爐　火を添へて　重帷を下す
春寒不恨約花住　春寒　恨みず　花を約し住むるを
一日開遅落亦遅　一日　開くこと遅ければ　落つるも亦た遅し

「酒店」に云はく。

和風暖日雪消時　和風　暖日　雪の消ずる時
遥過溪橋訪酒旗　遥に溪橋を過て　酒旗を訪ぬ
壁上新題殷點檢　壁上の新題　殷（さかん）に點檢すれば
春来其某看梅詩　春来　某某　梅を看るの詩

「夏日田園」に云はく。

杜宇聲中欲雨天　杜宇聲中　雨ならんと欲する天
村村麦熟小豊年　村村　麦熟す　小豊年

腰鎌農叟歸来處　鎌を腰にする農叟　歸り来る處
一朶黄雲擔在肩　一朶の黄雲　擔て肩に在り

余、最も其の、

山近知秋早　山近くして秋を知ること早く
池深得月多　池深くして月を得ること多し

の一聯を愛す。

【大意】董堂、名は敬議、字は伯直である。書で世間に名を知られている。その書は、董玄宰を学んだものだ。そこから号としている。その「中野素堂を送る」に、

今日、君を送ってまだ別れていないというのに
もう今日から君が還ってくるのを待っているのだ

の語がある。とても優しい詩だ。また、「病中、花が咲くのが遅い」に言う。

二月中旬だが、まだ雪があり
石の爐に火を加えて帷を下ろす
春の寒さが花をつぼみのままにするのを恨むことはない
一日開くのが遅ければ、落ちるのもまた遅いからだ

「酒店」に言う。

のどかな春風の吹き、暖かい日に雪の消える頃
遥かに谷川の橋を渡って、酒屋を訪ねた
壁に書いてある新しい題詩を、つぶさに見ていくと
春から、誰それ誰それの、梅を看る詩でいっぱいだ

「夏の日の田園」に言う。

ほととぎすの声が聞こえるなか、天は雨降ろうとしている
村々では、麦が熟す小豊年だ
鎌を腰にさす農夫が帰ってくる時
一かたまりの黄雲のような麦が担われて肩にあるのだ

私は最もその、

山が近いので、秋に気づくのが早く
池が深いので、月が映ることが多い

の一聯を好む。

○董堂　中井董堂。書家、漢詩人、狂歌作者。一七五八～一八二二。
○董玄宰　明の文人、董其昌、玄宰は字。　○中野素堂　四話参照。
○小豊年　范成大「夏日田園雑興」に「小豊年」の語がある。

（二七）詩意の似た詩

島梅外、「紅葉」の句に云はく。

三日不来秋色老　三日　来らざれば　秋色老ゆ
前回好處已空枝　前回の好處　已に空枝

董堂は乃ち云はく。

前回来此未旬日　前回　此に来る　未だ旬日ならず
岸畔青楓太半丹　岸畔の青楓　太半は丹なり

語意、相同して、各の佳なるを妨げず。

【大意】島梅外の「紅葉」の句に言う。

三日来ぬまに秋景色は移ろい
前回の好風景はもう空しく枝ばかりだ
董堂のほうは、こう言う。
前回にここに来てからまだ十日も経っていない
岸辺の青青した楓の太半は紅かく染まっている
語の意は互いに同じだが、それぞれ別に優れていると言って問題ない。

○島梅外　小島梅外。十四話参照。　○董堂　中井董堂。四話参照。

【補説】江戸中期の大島蓼太の「世の中は三日見ぬ間の桜かな」と同想の詩である。

（二八）市川米庵の紹介

河孔陽、名は三亥、寛齋先生の長子なり。七八歳より米海岳が書を學ぶ。長ずるに及び、益す其の妙を極む。余、常に言ふ、「方今、都下、書を能くする者、二人、老人は則ち柴栗山、少年は則ち河孔陽なり」と。孔陽、詩、家風有り。「夏日」に云はく。

五更過雨暁来晴　五更　過雨　暁来晴る
夏木如衾村景清　夏木　衾の如く　村景清し
一寸青秧三寸水　一寸の青秧　三寸の水
田田浸得鬬蛙聲　田田浸し得たり　鬬蛙の聲

【大意】河孔陽、名は三亥、市河寛齋先生の長子である。七、八歳より米海岳の書を学ぶ。成長して、益々その妙を極めている。私は常に言っている、「現在、江戸で、書を能くする者が二人いて、老人では柴野栗山、若者では河孔陽である」と。孔陽は、詩も家の伝統がある。「夏日」に言う。

夜明け前の通り雨も暁とともに晴れ
夏の木はふっくらと布団のようで、清らかな村景色だ
一寸の苗に三寸の水
連なる田んぼには、やかましい蛙の声を水に浸すようだ

○河孔陽　市河米庵。　○寛齋　市河寛齋。　○米海岳　北宋の書家・文人、米芾。海岳は号。　○柴栗山　柴野栗山。漢学者。一七三六～一八〇七。

（二九）増田董齋の紹介

詩を作るの人、固より少なし。詩を観るの人も亦た多からざるなり。余、一詩を得る毎に則ち必らず之を増田董齋に示す。董齋、必ず解頤首肯す。董齋の如き能く詩を觀るの友と謂ひて可なり。董齋、名は濤、字は萬頃。篆刻を善くす。後、詩を學ぶ。詩、甚だ新奇。故に、寛齋先生、贈て云はく。

風情更轉雕蟲手　風情　更に雕蟲の手を轉じて
裁出江湖新様詩　裁出す　江湖新様の詩

其の「梅を看る」に云はく。

晴溪流淺可三尺　晴溪　流淺くして　三尺可(ばか)り

小艇探春次第移　小艇　春を探して　次第に移る
一樹梅花乍横水　一樹の梅花　乍ち水に横る
短篙無處避瓊枝　短篙　處として瓊枝を避くる無し

又、「四月」に云はく。

山雨晴時繁嫩緑　山雨　晴るる時　嫩緑繁し
海雲破處過新鵑　海雲　破るる處　新鵑過ぐ
漁郎恰報松魚信　漁郎　恰も報ず　松魚の信
便是鎌倉四月天　便ち是れ鎌倉四月の天

松魚、鎌倉に出る者を以て、第一と為す。都下、之を賞すること猶ほ華人の蟹螯を賞するが如し。其の初て出るや、或は劍を賣り衣を典つて以て之を争ふに至る。柏舒亭が謂ふ所、

欲鮮新衣當新味　新衣を鮮て新味に當てんと欲す
朝暾窓外賣松魚　朝暾　窓外　松魚を賣る

亦た此を謂ふなり。

【大意】詩を作る人が少ないのは勿論だが、詩を観る人もまた多くないのである。私は、詩一首ができる毎に必らず増田菫齋に示す。菫齋は、必ず非常に感心してくれる。菫齋のような人は、能く詩を観る友と言うべきであろう。菫齋、名は濤、字は萬頃である。篆刻を得意としている。後に、詩を学ぶ。その詩は、非常に新奇である。そこで、寛齋先生が、贈て言う。

さらに風流なことに、篆刻の手を替えて
市井を描く新奇な詩を紡ぎ出すのだ

その「梅を看る」に言う。

晴れた谷川の流れは浅く、三尺ほど
小舟で、春景色を求めて順番に移動していく
一樹の梅花が水面にいっぱいに広がって映っている
短かい篙だが、水面に映った玉のような枝を避ける場所がない

また、「四月」に言う。

山の雨が晴れるころには、若葉が茂り
海上の雲が破れるところに、初めてのホトトギス
あたかも漁師が、初鰹の知らせを報ずる
まさにこれが、鎌倉の四月の天だ

鰹は、鎌倉に上がるものを第一としている。江戸市中で、これを賞することは、中国人が蟹の鋏を珍重するようなものだ。初鰹が出るや、あるいは劍を売り着物を質入れしてこれを争い求める。柏舒亭の言う。

新しい着物を脱ぎ質に入れて新味に充てようとする
朝日のあたる窓の向こうで鰹を売る声が聞こえる

この辺の事情を述べたものである。

○**増田菫齋**　篆刻家。一七六四～一八三三。　○**鮮頭首肯**　『漢書』匡衡伝「匡、詩を説きて人の頤を解く」　○**風情更轉～**　『寛齋遺稿』巻二「贈菫齋」　○**可**　『詩家推敲』「纔二十五餘可（バカリ）。コレ許ノ字ニ、バカリノ訓アルニ同シ」とある。　○**一樹梅花乍横水**　林逋の「山園小梅」に「疎影横斜」とある。　○**「四月」**　江

戸時代前期の俳人、山口素堂の「目には青葉山ほととぎす初鰹」と同想である。　○欲解新衣〜　柏木如亭『木工集』「夏初」

（三〇）詩佛の詩論（辭の主）

十日の苦心、要は一字半句を得るに在り。其の已に之を得るに當りては、知る、古に某の字、某の語を作るの初、其の句、其の詩の為めに作る者の若きを。譬へば、疎影暗香の字の如き、一たび林君復の手に落て、千載、梅を咏ずる者、復た侵すべからざるなり。是れ辭に主有りと謂ふ。我が黨、詩を作る、宜しく相為めに之を避くべし。

【大意】十日間の苦心も、結局はたったの一字半句を得ることにある。そしてそれを得たら、古に初めて、ある字ある語を作り、あの句あの詩を作った者の苦心がよくわかるのである。例えば、「疎影暗香」の字は一回、林君復の手に落ちて千年、梅を詠ずる者は、けっしてそのまま用いてはいけないのである。これを、「言葉には主がある」と言う。我が党で詩を作る場合必ずこれを避けるべきである。

○疎影暗香　林逋「山園小梅」「疎影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏。」の聯を指す。　○林君復　宋の詩人、林逋の字。

【補説】注に引用した林逋の「山園小梅」詩の語句は、梅に関する詩に非常に多く使われているが、大窪詩佛の詩には、それが見られない。

（三一）詩佛の詩論（解すべからざるの詩）

詩、解すべからざる莫し。而して其の解すべからざる有るは則ち天下至公の解すべからざるに非ず、唯だ我一己の解すべからざるなり。世人、動もすれば「妙處解すべく解すべからざるの間に在る」の一語を以て之を率ぬ。誤れり。余、「櫻草を咏ずる」七律に、

惜将五色染雲手　　惜むらくは五色雲を染むるの手を将て
却換千枝戴雪姿　　却て千枝雪を戴く姿に換ふる

の語有り。麓谷老人、觀て曰はく、「此の句、解すべからず」と。余、黙然たり。爾後、人に遇へば必ず此を擧て之を問ふ。衆、皆な解すべしと曰ひて而して後、心、初て安し。

【大意】詩は解釈できないものはない。そして、その解釈できないものがあるのは、天下の誰でもが解釈できないのでなく、ただ自分だけが解釈できないのだ。世間の人は、どうかすると「詩の面白い所は解釈できるかできないかの間にある」の語に従っている。それは誤りである。私の、「櫻草を詠ずる」七言律詩に、

惜しいことに瑞祥の五色の雲を染めた手のような紅色の五弁の花を
わざわざ、千枝に雪を戴く白い姿に変えてしまったことだ

の語がある。麓谷老人がこれを見て言った、「此の句は、解釈できない」と。私は、黙っていた。それ以後、人に遇うと必らずこの詩を取り上げて尋ねた。皆、解釈できると言ったので、その後、やっと

安心した。

○「妙處解すべく〜」　王世貞『藝苑巵言』巻四「若落意解當別有所取、若以有意無意可解不可解間求之、不免此詩第一耳。」　○「櫻草を咏ずる」　桜草は、もともと淡紅色だが、この時代に白色などの変種が多く作られたことを指すか。　○**麓谷老人**　谷麓谷。三十二話参照。

（三二）谷麓谷の紹介

麓谷、姓は谷、名は本脩。畫家文晁が父なり。性、詩を好む。年七十餘、詩會有るを聞くときは則ち必ず之に造る。韻を分ち詩を賦す。筆を下せば立ろに成る。必ずしも八叉を待たず。詩を作るの速かなる、余、未だ斯の如き者を見ざるなり。麓谷、常て自ら云はく、「我、速に作るの病有り。是を以て詩多くは粗硬に属す」と。然れども、其の、

半夏夏初草　半夏　夏初の草
長春春後花　長春　春後の花

と云ふが如き、巧ならずと謂ふべからず。

【大意】麓谷、姓は谷、名は本脩である。画家の谷文晁の父である。根っから詩を好んでいる。年は七十過ぎだが、詩会が有ると聞けば必らず訪れ、韻目を分担し詩を作る。筆を下せば直ちにできあがる。八回手をこまねくと詩ができるのを早いというが、それ以上である。詩を作ることの速いことでは、私は、未だにこのような人を見たことがない。麓谷、常に自分で言う、「私には、速く作る病気があるのだ。そのため詩の多くは粗雑なのだ」と。しかし、その、

半夏生のころには、初夏の草
長春花は、晩春の花

という聯などは、巧妙でないと言えようか。

○**麓谷**　谷麓谷。漢学者。一七二九〜一八〇九。　○**文晁**　谷文晁。画家。麓谷の子。一七六三〜一八四〇。　○**八叉**　八叉手。詩を作るのが早いこと。八回、手をこまねく間に詩が出来たという温庭筠の故事。

（三三）中田粲堂の紹介

滕粲堂、名は愽。「春雨」に云はく。

吟社探梅期在近　吟社　梅を探る　期　近きに在り
旗亭問柳約何違　旗亭　柳を問ふ　約　何ぞ違はん

又、云はく。

潤花霑柳功非一　花を潤し柳を霑す　功　一に非ず
渾在霏霏漠漠中　渾て霏霏漠漠の中に在り

又、

花溪鳥浴紅邊水　花溪　鳥は浴す　紅邊の水
草徑人衝緑處烟　草徑　人は衝く　緑處の烟

夕摘畦蔬和雪煮　夕べに畦蔬を摘て　雪に和して煮
晨収林葉帶霜焼　晨に林葉を収て　霜を帯て焼く

の句有り。皆な佳なり。粲堂の婦を舜英と曰ふ。麓谷老人の女、文晁の妹なり。其の嫂、幹幹と同く畫に工なりと云ふ。

【大意】滕粲堂、名は博である。「春雨」に言う。

吟社で梅を探る約束の日が近くなってきた
酒屋で柳を訪ねる約束をどうして忘れようか

また、言う。

花を潤し柳を潤す、その功は一つではない
すべては濛濛とした春雨に包まれている

また、

花の咲く紅の谷川に鳥は浴し
緑深き草の道を、靄を衝いて人は行く

夕方に畑の野菜を摘んできて、雪といっしょに煮て
朝には林の葉を集めて、霜を帯びたまま焼く

の句がある。みな佳句である。粲堂の妻は舜英と言う。麓谷老人の娘で文晁の妹である。その兄嫁の幹幹と同じく画が巧みであるという。

○滕粲堂　中田粲堂。漢学者・篆刻家。一七七二～一八三二。　○渾在霏霏漢漢中　詩佛に「霏霏漢漢更紛紛」の句がある（『今四家絶句』など）。　○舜英　画家。中田粲堂の妻、谷麓谷の娘、谷文晁の妹。　○幹幹　谷文晁の妻。林氏。翠蘭と号したという。

（三四）閨秀順姑の紹介

閨秀、詩を善くする者、近世、唯だ木端人が妻、順姑一人のみ。島梅外、将に其の遺稿を刻して之を『雨餘軒叢書』に収めんとす。余、梅外に就て數首を得たり。「午睡」に云はく。

春到梨花日漸長　春　梨花に到りて　日　漸く長し
簾前睡静不添香　簾前　睡　静かにして　香を添へず
軽風吹夢時醒起　軽風　夢を吹て　時に醒て起く
雲白窓紗未夕陽　雲　窓紗に白ふして　未だ夕陽ならず

「雪後」に云はく。

碧紗風透攪幽夢　碧紗　風　透て　幽夢を攪す
貪暖枕衾将起遅　暖を貪る枕衾　将に起きんとすること遅し
怪底雨聲連打砌　怪底す　雨聲の連りに砌を打つを
繞檐踈滴雪消時　檐を繞る踈滴　雪の消ずる時

「三月盡」に云はく。

殘夜惜春眠不成　殘夜　春を惜て　眠　成らず
柔腸斷盡遠鐘聲　柔腸　斷盡す　遠鐘の聲
暗燈閑把金釵剪　暗燈　閑に金釵を把て剪る
一陣軽寒入五更　一陣の軽寒　五更に入る

「夜景」に云はく。

緑動庭間夜景清　緑　庭間に動て　夜景清し

小欄倚偏觧殘醒　小欄　倚り偏して殘醒を觧く
一痕纖月亂雲外　一痕の纖月　亂雲の外
聽得子規三四聲　聽き得たり　子規の三四聲

「春曉」に云はく。

昨夜庭前風雨過　昨夜　庭前　風雨過ぐ
朝暾紅映碧窓紗　朝暾の紅は碧窓紗に映ず
黄鸝百囀眠初醒　黄鸝百囀　眠　初て醒む
獨對海棠看落花　獨り海棠を對して　落花を看る

【大意】女流で、詩を得意とするのは、最近では、木端人の妻の順姑一人だけである。島梅外は、その遺稿を刻してそれを『雨餘軒叢書』に収めようとしている。私は、梅外を通じて数首の詩を手に入れた。

「昼寝」に言う。

春も梨の花が咲く頃になって、日もだんだんと長くなった
簾を下ろして静かに眠り、香を焚いたりもしない
そよ風が、夢みる自分に吹いて、ふと目覚めて起きると
雲が窓のカーテンに白く映って、夕暮れにはまだ間があるようだ

「雪の後」に言う。

緑のカーテンから風が通って、静かな夢を乱す
布団で暖を貪って、起きるのもつい遅くなる
砌を打つ雨音がしきりにするのを不思議に思うと
それは軒から垂れる水音、雪が解けてきたのだ

「三月の終わり」に言う。

三月も残りわずか、終わろうとする春を惜しんで眠れない
感傷的な心を更に遠い鐘の音がかきたてる
灯もほのかになってきて灯芯を静かに金の釵で切って明るくする
ひとしきり寒さを感じると、もう夜明け近い

「夜の景色」に言う。

緑が庭間に動くのが見えて、夜景も清らかだ
小さな欄干にずっと寄ったまま、酔いを醒ましている
一つの細い月が、乱雲から出て
ホトトギスの声が三四声、聞こえる

「春の暁」に云はく。

昨夜、庭には風雨があったようだ
朝日の紅色が緑のカーテンに映って
ウグイスの声がたくさんして、眠りからやっと醒めた
一人で海棠に向かって、落ちた花を見る

○木端人、順姑　ともに不明。　○島梅外　小島梅外。十四話参照。
○『雨餘軒叢書』　不明。　○「春曉」　名高い、唐の孟浩然「春曉」詩とほとんど同想である。

（三五）夭折の才子、木偵の紹介

古より才子福分少し。天の命を賦する、其れ曷ぞ斯の如きや。若し早く其の生を奪はんと欲せば則ち始より之が才を與すること莫きに如かざるなり。小川笙船が孫、藤吉、井金峩の孫、冨蔵が若き、皆

な奚疑塾の才子と稱せらる。而して早世、傳ること莫し。悲しいかな。木偵、字は貞人も亦た江湖社中の一才子なり。歳二十二にして卒す。其の「江上即事」に云はく。

岸葦秋深雨後叢　岸葦　秋深し　雨後の叢
寒烟散處泊孤蓬　寒烟　散ずる處　孤蓬を泊す
清風乍起波搖月　清風　乍ち起て　波　月を搖す
百尺銀龍浴水中　百尺の銀龍　水中に浴す

又、「春曉」に云はく。

雙屐餘痕半庭蘚　雙屐　痕を餘す　半庭の蘚
夜来知有竊花人　夜来　知る　花を竊む人有ることを

【大意】古しえから才子に長寿な人は稀である。天命というものは、なぜこのようなものなのであろうか。もし若くしてその命を奪うのならば、最初から才能を与えない方がましなのではないか。小川笙船の孫の藤吉、井金峩の孫の冨蔵など、みな奚疑塾の才子と称せられていたが夭折して、世に知られることはなかった。悲しいことである。木偵、字は貞人という人もまた江湖詩社の中の一才子であった。二十二歳にして亡くなった。その「江のほとりの即事」に言う。

雨あがりの岸べの葦の叢をみれば、秋も深まったようだ
冬の靄も消えたころに、小さな舟を泊める
ふと清らかな風が起きて、波が水面の月を揺らす
百尺もの銀の竜が、水中に泳ぐようだ

また、「春の暁」に言う。

下駄の痕が庭の半ばを掩っている苔に残っている
夜間に花盗人があったようだ。

○小川笙船　町医者。養生所設立に尽力する。一六七二～一七六〇。○藤吉　小川泰山。漢学者。相模の大山の奇童と言われ、山本北山に学ぶ。一七六九～一七八五。　○井金峩　井上金峨。漢学者。一七三二～一七八四。　○冨蔵　井上冨蔵。『臭蘭稿甲集』に「送別」の詩があり、「井金峩の孫、南臺の子」とある。　○奚疑塾　山本北山の私塾。　○木偵　不明。　○江湖社　市河寛齋の主催する詩社。清新性霊派の詩風を主導した。

（三二八）夭折の鈴木廉夫の詩讖

鈴木恥、字は廉夫、川越の人。亦た早く卒す。嘗て、

有酒逢花君且醉　酒有り　花に逢ふ　君　且らく醉へ
世間開落暫時中　世間の開落　暫時の中

の句有り。是れ其の詩讖に似たり。

【大意】鈴木恥、字は廉夫、川越の人である。この人もまた早く亡くなった。かつて、

酒があって花に逢う時は、君よ、まあしばらく酔いたまえ
世の中で、開いたり落ちたりは、わずかな時間のうちのことなのだから

の句があった。この詩はその夭折を予言していたようだ。

○鈴木恥　『臭蘭稿甲集』「鈴木廉夫。名は恥、号して樸屋と曰ふ。俗称は範蔵。武州川越の人」とある。　○詩識　詩の内容が予言となること。

（三七）中野惕翁の紹介と詩識

中野惕翁、名は正明、字は誠甫。素堂が父なり。「病後、歩を試むる」に云はく。

試出衡門外　試に衡門の外を出でて
曳筇烟水郷　筇を曳く　烟水の郷
衰殘劍初重　衰殘　劍　初て重く
疲瘦帶殊長　疲瘦　帶　殊に長し
徐歩遭人訝　徐歩　人に訝かられ
閑身憐世忙　閑身　世の忙きを憐む
唯乗軽暖好　唯だ軽暖の好きに乗じて
隨意追梅香　隨意に梅香を追ふ

能く衰老の状を模写す。其の書齋を乾乾齋と曰ふ。「寛政戊午の春、年六十四、易を讀て感有る」に、

八卦重成齊我年　八卦　重て成して我が年に齊し

の句有り。後、何も亡ふして病に臥して起きず。六十四卦、其の數、限有り。詩識と謂ふべし。

【大意】中野惕翁、名は正明、字は誠甫である。素堂の父である。「病後に、散歩を試みる」に言う。

試しに粗末な門の外に出て
杖を曳いて、靄の川辺を歩く
すっかり衰えて剣を初めて重く感じ
やせこけて、帯がどうも余るようだ
ゆっくり歩いているので、人にいぶかられるが
暇な身の私は、世間の忙しさがかえって気の毒だ
ただ、気持ちいい暖かさに乗じて
気儘に梅の香を追って歩いているのだ

うまく、衰老の様を描写している。その書齋を乾乾齋と言う。「寛政十年の春、年六十四、易を読て感じることが有って」に、

八卦を八回、重ねれば、自分の年齢と同じだ

の句がある。後に、特別な病もなく病に臥して亡くなった。六十四卦の数は、それ以上の数がない。詩が予言していたのだろう。

○中野惕翁　ここの記述以外未詳。　○乾乾齋　乾乾は、怠らずに努力するさま。『易経』に基づく齋号である。

【補説】前話につづいて詩識の話題である。

（三八）幼公の為の觀蓮節

六月二十四日を觀蓮節と為す。我が邦、未だ此の節を賞する者有る

ことを聞かず。北山先生、此の日を以て上毛、永澤容、字は幼公が為に同社詩人を東叡山下の不忍池に會す。「觀蓮節、『幼公遺稿』を讀む」を以て、題と為す。一時、會する者、四十餘人。秋田の小野華陽、七律一首有り。後二聯に云はく。

能留身後無窮業　能く身後無窮の業を留め
宛遇生前未見人　宛として生前未見の人に遇ふ
襲袂幽香拂不去　袂を襲ふ　幽香　拂れども去らず
詩魂莫是作花神　詩魂　是れ花神と作ること莫からんや

嗚呼、幼公、地下にして知ること有らば、其れ必ず之を稟ん。彼の佛を禮し僧に施し此を以て功德菩提と為す者に比れば則ち其の供養、幾何ぞ。

【大意】六月二十四日は觀蓮節とされている。我が国では未だかつてこの節を賞する者がいた話を聞いたことがない。北山先生は、この日に、上毛の永沢容、字は幼公の為に同社の詩人を東叡山の不忍池に集合させた。「觀蓮節に『幼公遺稿』を読む」を席の詩題とした。その時、集まった者は四十余人である。中に秋田の小野華陽の七言律詩の一首がある。後半の二聯に言う。

亡くなった後も永遠に残る無窮の詩業を残しているので
あたかも生前は会ったことがない人に会うような気持ちだ
袂に着く微かな蓮の香りは、払っても消えず
幼公の詩魂が、花の魂になったのではなかろうか

ああ、幼公が、あの世でこの詩を知ったならば、必らずこの詩を有難く受け取ることだろう。世間一般の仏を拝み僧侶に施して、それで供養したとする者に比べれば、この供養は、どれほど素晴らしいことか。

○**觀蓮節**　陰暦六月二十四日のこと。　○**北山**　山本北山。五話参照。　○**永澤容**　桐生の漢詩人、長沢紀郷の子。一七七二～一七九二。　○『**幼公遺稿**』　寛政五年刊。『幼公遺草』とも言う。幼公の作品数は少ないので、山本北山の序に、本項の集会の席上の詩を附録とした。　○**小野華陽**　小野崎尚甫。名は通賢。秋田藩士。一七五九～一八〇六。　○**後二聯**　『幼公遺稿』に載せる小野通賢の七言律詩の五句目から八句目。「拂」を「終」に作る。

（三九）『幼公遺稿』校訂者稲垣君義の紹介

稲垣君義、名は正方、小諸老侯の庶子、其の大夫稲垣伯弓が養子と為す。嘗て『幼公遺稿』を校訂す。君義、固より幼公と知ること有るに非ず。唯だ其の詩の散佚せんことを懼れて、之れが為に校訂す。幾も亡ふして君義も亦た世に即して、其の才、顯るること無し。余、僅に、

夕日春餘千萬紅　夕日　春き餘す　千萬紅

の一句を記す。

【大意】稲垣君義、名は正方である。小諸老侯の庶子であったが、その家老稲垣伯弓の養子となった。かつて『幼公遺稿』を校訂した。

君義は、もともと幼公と知り合いだったのではない。ただ、その詩の散佚を恐れて、その為に校訂したのである。いくらもたたないうちに、君義もまた亡くなって、その才能は知られることがなくなってしまった。私は、わずかに、

夕日はまだ沈みきらずに、千万もの紅を残している

の一句を覚えている。

○**稲垣君義**　『臭蘭稿甲集』に「名は正方、旭山と号す。信濃の人」とある。　○**稲垣伯弓**　『詩聖堂百絶』に「雨過小諸稲伯弓宅與牧野子大同賦」の詩題がある。牧野子大は不明だが、小諸藩主は牧野氏なので一族かもしれない。　○『**幼公遺稿**』　前話参照。

【**補説**】「夕日春餘千萬紅」のみを記憶しているように書かれているが、『臭蘭稿甲集』には、この詩全編を含めて五首の詩を載せるので、詩佛が知らないわけはなく、見るべき詩がないと判断したのかもしれない。

（四〇）亡友の為の雅集

飯田共懿、太田文思、其の亡友、高麗松溪、伊藤明行が為めに、都下の名士を十條村の西園精舎に會す。余、時に西遊して與（あずか）らず。北山先生、之れが序を作る。谷文晁、其の境、宋賢集會の地と、名、相暗合するに因て、紺紙金泥を以て李伯時が西園雅集の圖を寫して、之を贈る。亦た一時の盛會と云ふ。

【**大意**】飯田共懿と太田文思は、その亡くなった友、高麗松溪、伊藤明行の為に、江戸の名士を十条村の西園精舎に集めた。私は、その時、西へ旅していて誘いに与らなかった。北山先生が、この会の序を作った。谷文晁は、その地が宋賢集会の地と名が暗合するので紺紙金泥で李伯時の西園雅集の図を写して、これを贈った。また、当時の盛会であったと言う。

○**飯田共懿**　二十二話参照。　○**太田文思、高麗松溪、伊藤明行**　いずれも不明。　○**西園精舎**　不明。　○**北山**　山本北山。五話参照。　○**谷文晁**　三十二話参照。　○**李伯時**　宋の人、李公麟の字。詩書画をよくした。　○**西園雅集の圖**　本文の字形は「酉」に見えるが「西」であろう。西園雅集とは、宋の蘇軾・黄庭堅・秦観などの西園の集会をいい、時の人がそれを画に描いたという。

（四一）僧冷然の紹介

或は緇流の詩を毀りて云はく、蔬筍の氣を免れず、と。余、以為らく、然らず、と。緇流の詩の愛すべき所以の者は其の蔬笋の氣有るを以てなり。余、之れを花に譬ふ。海棠も花なり、牡丹も花なり、李梅桃杏、齊しく皆な花なり。黄紅紫白の異有ると雖ども、之を要するに一種の春色を粧點するに過ざるのみ。緇流の詩、之を花に求むれば則ち梅なり。余、其の字瘦せ、句寒く味淡く格清きを愛すなり。釋の冷然が「閑居雑詠」に云ふが如き、

虚心愛汝移新竹　虚心　汝を愛して　新竹を移し
清格慕君栽早梅　清格　君を慕ふて　早梅を栽ゆ

保社劉雷之輩士　社を保す　劉雷の輩の士
談玄魏晋以間人　玄を談ず　魏晋　以間の人

半生卜隠能知足　半生　隠を卜して　能く足ることを知り
一事於詩猶未廉　一事　詩に於て　猶ほ未だ廉ならず

謂ふべし、俗韻を脱す、と。又、

澆花晨汲帯春星　花に澆ぎ晨に汲み　春星を帯び
漫興詩篇多断句　漫興の詩篇　多くは断句

の句有り。亦た佳なり。冷然が詩、余、之を淺井觀齋に得たり。

【大意】ある人は、僧侶の詩を謗って、肉食しない坊主臭を免れないと言う。私は、そうではないと考えている。僧侶の詩の愛すべき点は、その坊主臭さあってのことなのである。私がこれを花にたとえれば、海棠も花、牡丹も花である。李、梅、桃、杏、どれも同じくみな花である。黄紅紫白のいろの違いはあるが、要するにひとつの春景色を飾るのに過ぎないのである。僧侶の詩を花に例えれば、梅である。私は、その字が痩せ、句が寒く、味が淡く、格が清らかなのを好んでいる。釈冷然の「閑居雑詠」に言うのは、

心の虚ろな汝を愛して、新竹を移し替え
清らかな君を慕って、早梅を植える

劉氏や雷氏の仲間の士は、白蓮社を保ち
魏や晋の時代の人は、清談といって玄を談じた

半生、隠居にふさわしい場所を探し、満足するところを見つけ
たった一つの仕事である詩なのに、まだ俗を抜け切らない

俗な調子を脱していると言うべきである。また、

春の星の下、朝に水を汲み花に注ぎ
気持ち次第に作った詩の多くは未完成のままだ

の句がある。これもまた佳句である。冷然の詩は、私は浅井観斎から手に入れた。

○保社劉雷～　劉程之や雷次宗が、慧遠の作った念仏結社、白蓮社の構成メンバーであったことを指す。　○談玄魏晋～　魏や晋の時代の竹林の七賢などを指す。　○淺井觀齋　『詩聖堂詩集初集』巻七「題淺井觀齋新居」の詩を収めるが、未詳である。

（四二）詩佛遊歴のエピソード

余、西遊の日、途、信濃に出づ。小諸の稲垣伯弓が家に宿すること三四日、城下の人士、来て詩を求むる者、數十人。僧觀禪なる者有り。亦た来て余に見ゆ。余が詩の凡ならざるを稱歎して因て問て曰はく、「公、都下に在て痩梅先生を知るや」と。余、曰はく、「之を知る。和尚、何を以て獨り痩梅が名を記す」と。僧、曰はく、「痩竹先生、曽て此の地に遊ぶ。我、之を見ゆることを得たり。我、聞く、

都下に瘦竹・瘦梅の二先生有て詩を以て一時に鳴ると。余、公の詩を觀するに尋常の人に非ず。必ず二先生の徒ならん。我、是を以て之を問ふ」と。余、咲て曰はく、「和尚、一隻眼を具して、我を觀る。瘦梅、是れ我なり」と。僧、愕然として曰はく、「先生の名を聞くこと之れ久し。何ぞ圖らん、今日相見りことを得んとは。豈に一大因縁ならずや」と。乃ち詩を作て余に贈る。

若無瘦竹吟詩瘦　若し瘦竹が詩を吟じて瘦たる無くして
誰與瘦梅同比肩　誰か瘦梅と同じく肩を比する

の語、有り。余、席間、韻を次して之に答ふ。云はく。

如今許作詩人否　如今　許して詩人と作さんや否や
一箇詩囊擔在肩　一箇の詩囊　擔て肩に在り

瘦竹は、柏舒亭が別號なり。

【大意】私の西遊の途中、信濃に寄ることがあった。小諸の稲垣伯弓の家に三四日も泊まった時、城下の人士が来て詩を求める者が、数十人もやってきた。なかに、僧の觀禪という者がいて、やって来て私と会った。私の詩を非凡であると賞賛して、そこで尋ねて言うには、「貴方は江戸で瘦梅先生を知っていますか」。私、「知っています。和尚は何故、瘦梅の名を知っていますか」。僧、「瘦竹先生は、かつて当地にいらっしゃいました。私も、その時お会いできました。聞くところでは、江戸に瘦竹と瘦梅の二先生がいて、詩で名高いということです。私が、貴方の詩を拝見するところただのお方ではありますまい。きっと二先生のお仲間だろうと思いまして。そこでお尋ねしました」。私も笑って、「和尚は、半分の眼力を持って私を御覧になった。瘦梅は実は私です」。僧は驚いて、「先生の御高名は以前から聞いておりました。なんとここで今日、お会いすることができようとは。実に一大因縁と言えましょう」と。そこで詩を作て私に贈った。

もし瘦竹が詩を吟じて瘦た詩でなければ
誰が瘦梅と同じように肩を並べることができようか

の語があった。私も、席上、次韻してこれに答えた。言う。

今日、私は詩人と称する事ができるのかどうか
一つの詩囊を担って肩にあるのだ

瘦竹は、柏舒亭が別号である。

○**稲垣伯弓**　三十九話参照。　○**僧觀禪**　不明。　○**一隻眼**　詩仏を尋常ならざる人と見破ったのは鋭かったが、瘦梅本人だとは気づかなかったことを言う。　○**柏舒亭**　柏木如亭。三話参照。

（四三）詩佛の詩歴（二瘦詩社）

余、嘗て舒亭と詩社を東江精舎に開く。號して二瘦詩社と曰ふ。来て盟に與（あずか）る者、百餘人、北山先生、之が引を作す。固より一星の銀、半尺の布を受けず。痛く世の李王を為す者を斥く。是に於て格調の徒、豬のごとく怒り、虎のごとく視て、議論訩訩として止まず。然れども此に由て人を得るも亦た少なからず。世の我を刺り我を非る、吾に於て何か有らん。

【大意】かつて私は、舒亭と詩社を東江寺で開いた。二瘦詩社と名づけた。参集して仲間となった者は百人余りで、北山先生は、この序文を作った。もとより、わずかでも金など支援は受けなかった。こっぴどく、世間の李・王を奉ずる格調派を攻撃した。そこで、格調派の人たちは、猪のように怒り、虎のように視て、議論紛紛としたが、これによって仲間を得たことも少なくない。世間が私たちを謗り攻撃するのも、私にとっては何でもないことだ。

○**舒亭**　柏木如亭。三話参照。　○**東江精舎**　東京都墨田区、東江寺。多田薬師とも。「大窪家の遠祖は多田満仲であったので、詩仏にとっては因縁のある場所」（揖斐高氏「大窪詩仏年譜稿」）という。○**二瘦詩社**　如亭・詩佛の別号の瘦竹・瘦梅から命名した。　○**北山**　山本北山。五話参照。　○**李王**　明の李攀龍と王世貞。五話参照。　○**格調**　古文辞格調派。

【補説】前段で瘦竹瘦梅の別号に関するエピソードを紹介して、続いて、清新性霊派の主張の覚悟を述べた段になっている。

（四四）詩佛の詩歴（一字の虚構）

余、五月半を以て木曽山中を過る。梅花、已に落て、桃李、盛に開く。余、詩を作らんと欲す。忽ち中野素堂が、

四月猶餘二月花　　四月　猶ほ餘す　二月の花

の句を憶す。遂に止む。因て謂ふ。若し四月を改て五月と為せば、是れ實事と雖ども詩を成さざるなり。袁子才が云はく、「張若駒、『五月九日舟中偶成』の詩、

水窓晴掩日光高　　水窓　晴て掩ふ　日光の高きに
河上風寒正長潮　　河上　風寒く　正に潮を長ず
忽忽夢回憶家事　　忽忽　夢回て　家事を憶ふ
女児生日是今朝　　女児の生日　是れ今朝

此の詩、真に是れ天籟、然れども女の字を把て一の男の字に換へば、便ち詩を成さず。此の中の消息、口、言ふこと能はず」と。余、深く悟ること有り。

【大意】私は、五月半ばに木曽の山中を通った。梅の花は既に落ち、桃やスモモが盛んに花開いていたので、詩を作ろうと思った。ふと、中野素堂の、

四月なのにまだ二月の花が咲いている

の句を思い出して、詩作は止めにした。そこで、もし四月を改めて五月とすれば、これは事実だとしても詩にならないのである。袁枚の言葉に、「張若駒の『五月九日舟中偶成』の詩に、

日が高く晴てきたので、船窓を掩った
川は、風も寒く、ちょうど潮も満ちてくる頃だ
とりとめもなく夢は回って、家の事を思い出すと
女児の誕生日は、まさに今日だった

この詩は、まさに自然に生まれた詩である。しかし、女の字を男の

字に換えれば、たちまち詩にならなくなる。ここらへんの微妙な感覚は、口で言い表すことができない」というのがある。私は、深く悟ることがあった。

○中野素堂　四話参照。　○袁子才　清の詩人、袁枚。　○「張若駒〜」　袁枚の『随園詩話』巻八「詩有極平浅、而意味深長。桐城張徵士若駒五月九日〜」以下、本文と同文である。

（四五）貧中病中の詩

陸放翁が詩に云はく。

糴米歸来午未炊　糴米　歸来て　午　未だ炊かず
家人竊憫老翁飢　家人　竊に憫む　老翁の飢るを
不知弄筆東窓下　知らず　筆を弄す　東窓の下
正和淵明乞食詩　正に淵明食を乞ふの詩を和せんとは

清人、魏懋堂が「山中積雪」に云はく。

寂寞山涯又水濱　寂寞たる山涯　又　水濱
漫天匝地白如銀　天に漫し　地に匝して　白して銀の如し
前村報道溪橋斷　前村　報道す　溪橋斷つと
可喜難来索債人　喜ぶべし　債を索るの人来り難きを

皆な貧中の趣を極盡する者なり。夫れ貧と之れ病とは人の悪(にく)む所にして詩に入るときは則ち佳なり。絲井翼、字は君鳳、「春日」の詩の如き、亦た能く病中の況を言ふ。云はく。

花開時節身多病　花開くの時節　身　多病
常負尋紅拾翠行　常に負く　紅を尋ね　翠を拾て行くに
知得春光遍原野　知り得たり　春光の原野に遍きを
近来連聴賣花聲　近来　連(しき)りに聴く　花を賣る聲

予も亦た絶句有り。云はく。

病軀曾被寒欺得　病軀　曾て寒に欺き得られて
不出茅檐半月来　茅檐を出でざること　半月来
知道江村已春好　知道す　江村　已に春好きことを
門前来賣満開梅　門前　来り賣る　満開の梅

以て君鳳が詩と並べ誦すべし。

【大意】陸放翁の詩に言う。

米を買って帰って来て、昼飯をまだ炊いていない
家族は、ひそかにこの年寄りが腹が減っているのを心配している
知らないのだ、東の書斎で筆を弄して
まさに陶淵明の「食を乞ふの詩」に和韻していようとは

清の人で、魏懋堂の「山中積雪」に言う。

実に寂寞とした山の果て、また水辺のこの村
天も地も真っ白で銀のように輝いている
隣村からの知らせでは、谷川の橋が壊れたということ
ありがたい、借金取りが来られなくなったぞ

どれも貧乏の趣を描き尽くしている。そもそも、貧と病とは世間では忌むものだが、詩に取り入れると面白いものである。絲井翼、字は君鳳の、「春日」の詩の如きは、病気の状況をうまく表したもので

ある。言う。

花開く時節だというのに、この身は病気がちだ
常に、紅い花を尋ね、緑の草を摘みに行く機会を失している
でもそうであってもよくわかる、春景色が野原に満ちているのを
最近、しょっちゅう、花の売り声を聴くのだ
私にもまた絶句がある。言う。
病気がちで、今まで寒さにやられ続け
粗末なこの家を出ないこと、もう半月
しかしよくわかるのだ、川辺の村が既にいい春景色であることが
門前に、満開の梅を売りに来るのだから
君鳳の詩と並べ誦してほしい。

○**陸放翁詩**　陸游「貧甚戯作絶句八首其八」。　○**淵明食を乞ふの詩**　陶淵明「乞食詩」に和韻した。所謂、和陶詩である。　○**魏懋堂**　不明。　○**絲井翼**　奥山榕齋。初め糸井氏。山本北山門下。漢学者。一七八一～一八四一。　○「**病軀曾被～**」　『詩聖堂百絶』「梅花開後得詩六首」の一首め。起句は「病軀猶被餘寒約」に作る。

（四六）　秋岡游の詞の紹介

秋岡游、字は賽魚なる者有り。性、詞曲に耽る。又、頗る詩を解す。嘗て予が痩梅菴に寓す。故有りて亡命す。今、其の在る所を知らず。予、「杉田村に梅を觀る」の一詞を記す。云はく。

梅花白點　梅花　白點す
山屏看不夢　山屏　看るに夢ならず
生客眼青　生客眼青し
溪送溪迎　溪送り　溪迎ふ
千曲折路似曾經　千曲折路曾て經るに似たり

此時呵樹垂楊被風吹　此の時　呵樹の垂楊　風に吹かる
一樣香　一樣に香し
玉兎昇　玉兎　昇り
金烏未墜　金烏　未だ墜ちず

真箇に奇創なり。

【**大意**】　秋岡游、字は賽魚という者がいる。性として、詞曲に耽っていた。また、詩もよく理解した。かつて私の痩梅菴に奇遇していた。故有って亡命した。現在、その所在は知れない。私は、「杉田村に梅を觀る」の一詞を覚えている。言う。
梅の花が白く点々と咲いている
それは山の屏風のようで、よく見ても夢ではない
なじみのない客でも青眼で
谷川は送迎してくれる
おかげで千回も折れ曲がった路でも、かつて来たことがあるところのようだ

この時、　しだれ柳が風に吹かれて、枝が木をうっていて
どこもが香しい
　月は昇り
　日はまだ落ちない頃
実に奇抜である。

○秋岡游　不明。　○詞曲　塡詞。　○杉田村　横浜市磯子区杉田。妙法寺境内が梅見の中心という。　○呵樹　用例の見つからない語だが、ここでは、風がしだれ柳の枝を揺らして、木を打つことを指すか。　○玉兎　月のこと。　○金烏　太陽のこと。

【補説】万樹の『詞律』や『康熙詞譜』は浩瀚な詞譜で僻調まで含まれているが、本文の「杉田村に梅を觀る」の詞牌は見出せなかった。

（四七）沈雄痛快な一句

或は余の為めに「畫虎に題する」の句を誦す。云はく。
　想像深山草木風　　想像す　深山草木の風
沈雄痛快、七字、之を盡す。余、復た其の他を觀ることを願はず。只だ恨むらくは作者の姓名を失することを。
【大意】ある人が私の為めに「畫虎に題する」の句を誦してくれた。詩に言う。
　深山草木の風を想像す
虎の、猛々しく痛快なところを、たった七字で、描ききっている。私は、他の句を見たいとは思わない。ただ、残念なことに作者の姓名は忘れてしまった。

【補説】次段で佳句を紹介する前置きとして、一句だけで読む面白さを示したか。

（四八）近人の佳句

余、常にして近人の句を摘て、之を録す。時に一たび出して之を觀る、以て一日三秋の思を慰するに足れり。聯句、佳なる者、今川剛侯が云はく。
　酒美因城近　　酒の美なるは城の近きに因り
　魚肥為浦豊　　魚の肥たるは浦の豊なるが為なり
鷹野魯屋が云はく。
　品茗風過面　　茗を品すれば　風　面を過ぎ
　嘗醪春到唇　　醪を嘗むれば　春　唇に到る
北條士伸が云はく。
　晩程鴉背日　　晩程　鴉背の日
　霜信馬頭風　　霜信　馬頭の風
橋本子行が云はく。
　拂柳風飛粘展絮　　柳を拂ふ風は展を粘する絮を飛し
　捲花波送載薪舟　　花を捲く波は薪を載する舟を送る
所柳灣が云はく。
　花梢餘落日　　花梢　落日を餘し

灘底起軽雷　灘底　軽雷を起す

院暗僧歸早　院暗くして　僧　歸ること早く
山紅日暮遅　山紅にして　日　暮るること遅し

余が門人、菅中菴が云はく。

柳邊風有力　柳邊　風に力有り
苔上雨無痕　苔上　雨に痕無し

垣内淡齋が云はく。

熟路皆生景　熟路　皆な生景
新知如舊交　新知　舊交の如し

又、結句佳なる者有り。島梅外が、

三月易過七八日　三月　過ぎ易し　七八日
明朝雨歇出看花　明朝　雨歇はば出でて花を看ん

吉川子愿が云はく。

病身還怕新涼到　病身　還た怕る　新涼の到ることを
脱却生衣著熟衣　生衣を脱却して熟衣を著く

又、五七字單句佳なる者有り。魯屋が、

竹瘦轉添神　竹瘦て轉た神を添ふ

星孟喬が、

風添潮勢海生烟　風　潮勢を添へて　海　烟を生ず

岡村養拙が、

日永林中野鳥飢　日永ふして　林中　野鳥　飢ゆ

柏舒亭が、

漁網孤村月　漁網　孤村の月

句至窮愁清且新　句は窮愁に至て清にして且つ新なり

と。皆な是なり。

【大意】私は常に現在の詩人の句を摘録している。時々それを出して見ていると、日がな一日の退屈を慰めることができる。優れた聯で、今川剛侯の作。

酒が旨いのは町が近いためで
魚が肥えているのは海の豊かなためである

鷹野魯屋の作。

茶を品評すると、風が顔を吹き過ぎるようで
濁り酒を一口なめれば、春が唇に来たようだ

北條士伸の作。

晩の帰り道、鴉の向こうに日が沈み
霜を知らせる雁が、馬頭をかすめる風にのって飛んでいく

橋本子行の作。

柳をなでる風は靴にまつわる柳絮を飛ばし
落花を巻き上げる波は薪を載せる舟を送る

所柳灣の作。

梢の花にはまだ落日が当たり
早瀬は軽い雷のような音を起こす

寺院は暗く、僧の帰りは早い
山はいつまでも日が当たり、日の暮れるのが遅い
私の門人の、菅中菴の作。
柳の木の近くでは、風に力がありそうに見え
苔の上では、雨が降っても痕も残らない
垣内淡齋の作。
慣れた道でも、みな新鮮な景色であり
新しい知り合いも、みな旧知のようだ
また、結句の優れたものがある。島梅外の作。
三月はあっという間に、七八日も過ぎてしまう
明朝に、雨が止んだなら家を出て花を見よう
吉川子愿の作。
病身ではかえって、新涼が到るのが心配だ
新しい着物を脱いでやはり慣れた着物を着る
また、五七字の一句で優れたものがある。魯屋の、
竹は痩せていよいよ品格が増す
星孟喬の、
風は潮の勢を加えて、海に靄を生じさせる
岡村養拙の、
日は長く、林には野鳥が飢えている
柏舒亭の、
僻村で晒す漁網を月が照らす
句は、貧乏になってかえって清らかで新鮮である
の作。みな素晴らしい。

○**今川剛侯**　『臭蘭稿甲集』「名は毅、緑窓と号す。備後福山の人」とある。『卜居集』の菅伯美の項の注として「伯美、同社友の今川剛侯の兄なり」とあり、菅伯美の弟であるのが知られる。菅伯美は、菅谷帰雲。十七話参照。　○**鷹野魯屋**　七話参照。　○**北條士伸**　北條蟾堂。漢学者。『五山堂詩話』補遺巻五に見える。　○**橋本子行**　不明。『臭蘭稿甲集』に五首の詩が見える。　○**所柳灣**　詩人、医者。『臭蘭稿甲集』「所君懐、名は維恵、柳湾と号す。奥州の人」とある。○**院暗僧歸早**　四話の「院静似無僧」の項参照。　○**菅中菴**　不明。○**垣内淡齋**　不明。　○**島梅外**　小島梅外。十四話参照。　○**吉川子愿**　『臭蘭稿甲集』「名は恭、反齋と号す。伊賀疾医」とある。○**星孟喬**　不明。　○**岡村養拙**　不明。　○**柏舒亭**　柏木如亭。三話参照。

【補説】詩佛の摘録の範囲、方法や交遊範囲の詩人がわかって興味深い段である。

（四九）補足

余、詩話を作す。或は其の采収、公ならざるを毀る。余、曰はく、「語に言はずや、爾が知る所を挙げよ」と。或は復た曰はく、「子、北、秋田に到り、西、備中に遊ぶ。經歴する所、二十餘國。栲亭・

六如の諸人、皆な其の知る所なり。豈に此に止らんや」と。余、又、小説の結語を擧て、之に告て曰はく、「且らく下回の分觧を聽け」と。

【大意】 私が、この詩話を作ると、ある人はその詩の掲載が公平ではないのを誹った。私は、「言葉だけでなく、貴方が実際に知るものをあげなさい」と言った。すると、ある人はまた言う、「貴方は、北は秋田、西は備中にまで行っている。既に行った国は、二十あまりにもなる。梼亭や六如の諸詩人、みな知っているではないか。なぜ、そうした詩人に触れず、ここで止めるのか」と。私はまた、小説の結語をとって、この人に告げて言った。「それは次回のお楽しみ」と。

○経歴する所　この時期は詩佛は遊歴を繰り返しているが、詳細は不明。　**○梼亭**　村瀬梼亭。漢詩人。京都詩壇の重鎮であった。一七四四?～一八一八。　**○六如**　僧侶。漢詩人。宋詩を主導し清新性霊派の先駆けとなった。一七三四～一八〇一。　**○「且らく下回の分觧を聽け」**　小説や講釈などで、ある段が終わった時の決まり文句。

【補説】 続編があるように書かれていて、実際には出版されないことはよくあることだが、『詩聖堂詩話』も書き継がれなかった。特別な理由はないのかもしれないが、大きな詩壇の状況から言えば、詩話形式の書としてはこの後、詩佛の盟友である菊池五山が『五山堂詩話』を長く出版し続けることになり、詩佛の詩集と五山の詩話は両輪のように、清新性霊派を牽引することになる。逆に、五山は晩年の小冊以外に個人詩集は出版しないのである。

なお、本稿は原文の翻刻は既にある詩話叢書本に譲り、訓読と注釈を試みたものだが、四十九話に限って詩話叢書本に載せないので、ここに句読点などを補った形で原文を附載しておく。

余作詩話、或毀其采収不公。余曰、「語不言乎、擧爾所知」。或復曰、「子北到秋田、西遊備中、所經歴二十餘國、梼亭・六如諸人、皆其所知、豈止于此乎」。余又、擧小説之結語、告之曰、「且聽下回分觧」。